

P214[濱木綿子宛]②・・・P214「大事(右圖参照)なのは相手方(C'場)がせりふを言ふ時(關係D1)、心ではなく(即ち『意D1は似せ易し』だから、意・氣持ち=D1の至小化ではなく)、體(姿)で聴いてみなければならない(Eの至大化:即ち『姿Eは似せ難し』だから、嘘が出来ないから)」⇒(左圖参照)「それ(體・姿で聴く:Eの至大化)をあなた(左△枠)は極端に無視してゐる(Eの至小化)」⇒(右圖参照)P215「相手(C'場)の言葉を聴いてゐるうち(場との關係D1)に、當然胸がふくらんで来る筈(心の動き:D1の至大化)で、そのふくらみ(心の動き:D1の至大化)が助走部(Eの至大化)となり、相手の話が終つた瞬間に踏切つて(Eの至大化)自分(右△枠)のせりふ(F)にならなければ(Eの至大化)ならない」。

《せりふの原則、テレビや映畫ではごまかせても芝居では絶対にごまかせないせりふの公理》:(西歐演劇=右圖参照)・・・

\* P215「それは、相手方(C'場)のせりふを聴いてゐる時(場との關係D1)にこそ、自分(△枠)の芝居(せりふFと動きE)のすべてが懸つてゐる(D1の至大化=Eの至大化)のだといふ事。自分(△枠)の番になつて初めて自分のせりふ(F)を喋るのではありません(Eの至小化)。そのせりふのすべて、いや、それ以上の事を、次に言ふ(E)自分(△枠)のせりふ(F)に盛切れぬほど多くの事を、相手(C'場)が喋ってゐる時(場との關係D1=即ち聴いてゐる時)に心の中(D1)で喋りまくつてゐる(E)のです。聴きながら(D1)喋つてゐる(E)のであり、したがつて、聴く事(D1の至大化)は喋る事(Eの至大化)なのです。

\* P216「役者(△枠)としての心得の第一は、自分のせりふ(F)を機械的に早く覚えてしまひ(E)、次にはその自分のせりふ(F)の切掛けになる相手(C'場)のせりふ(場との關係D1=心の動き)まですつかり覚えてしまふ事。その後で自他のせりふ(F)を忘れた様に自由になり(Eの至大化)、相手のせりふ(場C')が毎晩舞台の上(場C')で一つ一つ初めて聴く言葉の様に新鮮に聞えて來(D1の至大化)、自分のせりふ(F)もそれに應じて初めて口に出た様に新鮮に喋れる様(Eの至大化)になる事です(即ち、D1の至大化=Eの至大化)」。

